

日本古典文学全集

井原西鶴集
一

校注・訳

東 暉
峻
明 康
雅 隆

小学館・刊

井原西鶴集 一

日本古典文学全集 38

昭和46年3月10日 初版発行
昭和50年11月30日 第三版発行

校注・訳者

てる
暉
ひがし
東

おか
峻

やす
康
あき
明

たか
隆
まさ
雅

発行者

相 賀 徹 夫

東京都千代田区一ツ橋 2-3-1

印刷所

凸版印刷株式会社

東京都台東区台東 1-5

発行所 株式会社

小 学 館

東京都千代田区一ツ橋 2-3-1

〔郵便番号〕101〔振替〕東京 8-200

〔郵便番号〕編集 東京 03-264-8574

製作 東京 03-230-5333

販売 東京 03-230-5739

©Y. Teruoka A. Higashi
1971 (著者検印は省略いたしました)

造本には十分注意しておりますが、
万一落丁、乱丁などの不良品の場合
は、おとりかえいたします。

目次

解 說 五

凡 例 六

俳諧大句数

自 序 九

第 八 七

好色一代男

卷 一 九

卷 二 一三

卷 三 一四

卷 四 一五

卷 五 二〇

卷六 三七

卷七 三五

卷八 二六五

好色五人女

卷一 三〇七

卷二 三七

卷三 三五三

卷四 三七九

卷五 四〇三

好色一代女

卷一 四二七

卷二 四三七

卷三 四八三

卷四 五〇九

卷五		五三
卷六		五七

口絵目次

島原大門口図（独吟百韵自註絵巻）.....	1	初板本（好色一代男ほか）.....	11
浪華西鶴翁（芳賀一品筆）.....	5	短冊.....	12
三都遊廓地図（京都島原・大阪新町・江戸吉原）.....	6		

解説

一 市民文学の時代

十七世紀末の元禄時代をピークとして開花した近世前期の文芸は、日本におけるルネサンスである。江戸で戸田茂睡（もすい）は和歌の解放運動に尽力し、松尾芭蕉は民衆詩・俳諧を大成し、菱川師宣（もろのぶ）は版画芸術・浮世絵を大成した。その時、大阪では、下河辺長流（しもがへちやうりゅう）と僧契沖（けいちゅう）が、『万葉集』の研究によって国学の基礎を築き、井原西鶴（せいかく）は現実的な市民文学を確立し、近松門左衛門（きんしょうもんざゑもん）は竹本義太夫と提携して、人形浄瑠璃劇を大成した。京都では雁金屋の兄弟、尾形光琳（こうりん）と同乾山（けんざん）が、新古典派の華麗な画陶の美を発揮している。

十六世紀までの日本の文芸は、貴族を頂点として、僧侶と上流武士が参加した特権階級の独占するところであった。それが十七世紀にはいると、宗教時代から現実的な道徳（儒教）時代へとスイッチが切りかえられ、その命令と服従のモラルにもとづく身分制度と家族制度によって、国民大衆の人間性はいちじるしく疎外されることになった。だがしかし、一面新しい貨幣経済政策の採用によって登場したエネルギーで進歩的な市民（商工）に、^{*}インテリ浪人群が協力して、革新的な市民文学の時代を迎えることになったのである。

* 近世前期の革新的な歌人・歌学者の木下長嘯子・戸田茂睡・下河辺長流・契沖、俳諧の普及と革新に尽力した松永貞徳・斎藤徳元・西山宗因・松尾芭蕉、啓蒙教訓を意図した安楽庵策伝・如儒子・鈴木正三・浅井了意、それに浄瑠璃の近松門左衛門など、めばしい文人の多

くは浪人あがりである。

新興市民のエネルギー源

インテリ浪人群のリードのもとに、元禄文芸復興を達成した新興市民のエネルギーと能力は、一にかかって、その経済力にもとづくことはいうまでもないが、その原点は徳川家康の経済政策にあった。

文禄から慶長の間(一五九二—一六〇二)に、金座と銀座を設立して、統一的金銀貨幣の鑄造を開始し、ついで寛永十三(一六三六)年には銀座を設立して、一文銭の寛永通宝の鑄造を開始し、これで日本ははじめて統一的な貨幣経済時代を迎えたのである。そしてその貨幣を駆使して商品の流通に当たったのは、身分制度の上で最下位の商人であったことはいうまでもない。ことに新時代を迎えて貨幣を必要とした幕府・大名が、年貢米その他の国産品を売り捌くために設けた蔵屋敷の所在地、大阪・江戸・敦賀・大津・長崎などの商人で、商品の出納や売却に当たった、いわゆる蔵元町人は、大名財政の死命を制する実力を擁するにいたった。とくに元禄時代には蔵屋敷九十七邸に及んだ天下の台所・大阪において然りである。

しかし一六六〇年代(寛文期)までは、流通機構(海運)と金融機関(両替商制度)が未発達であったために、前記の蔵元町人や貿易の特権を与えられた長崎商人その他、権力と結託した特権町人の時代、いうならば資本蓄積の時代であった。ところが寛文十一年と同十二年にかけて、幕府は河村瑞軒(ずけん)に命じて、日本海沿岸と太平洋沿岸の航路の開拓と整備に成功した。それは全国に散在している四百万石にのぼる天領の年貢米の回漕が、困難をきわめていたからである。これはまさに近世経済史上、画期的な事業であって、幕府の利己的な意図とは関係なく、この東西航路の開設によって、伸び悩んでいた上方の商業資本は、一時に全国的な規模を擁することになり、早期資本主義時代への第一歩をふみ出したのである。

金融機関も歩調を合わせて整備された。万治の頃(一六六〇)までは、大阪の両替商は天王寺屋五兵衛ただ一人であった。それが十

年後の寛文十年には、「十人両替」の制が確立し、これを行事として「本両替」十二組、その下に「錢両替」を置いて、ようやく大阪の両替商制度は完備したのである。三都間の金飛脚が看板をあげたのは、翌十一年のことであった。

難波の津にも江戸酒づくりはじめて一門（鴻池）さかゆるも有り、また銅山（あかがね）にかかりて俄分限（往友）になるも有り、吉野漆屋して人のしらぬ埋み金ある人もあれば、小早（こばや）江戸回船作り出して船問屋に名をとるも有り。家質（かぢち）の銀貸（かねか）して富貴になるも有り、鉄山の請山（うけやま）して次第分限の人も有り。これらは近代の出来商人（できあきんど）（俄成金、三十年この方（寛文以降）の仕出しなり。

元禄元（二六〇）年刊の『日本永代蔵』の最終章で、西鶴が指摘しているように、商業資本主義への第一歩をふみ出した寛文以降、権力に依存しない実業家タイプの新興町人が台頭し、元禄文芸復興の新たなエネルギー源となったのである。大阪における俳諧の新風、西山宗因の風俗詩・談林俳諧が登場したのは寛文末年であり、その門下の井原西鶴が、保守的な貞門俳壇の攻撃に対し、強烈な新人意識をもって前衛的な同志（きょうしち）を糾合し、大阪生玉神社において万句興行を催し、反撃の旗幟（きし）をひるがえたのがその時点（二六三年）であったのは、思うに偶然ではない。

文盲追放

経済的には物々交換の自然経済から貨幣経済へ、政治的には武断政治から文治主義へという下部構造の変革は、また市民がみずからの文芸を所有するための、もっとも基本的な条件である文盲追放への道でもあった。

古代から室町時代（十六世紀）までの日本人の中で、文字による表現能力と読書能力をもっていたのは、貴族と僧侶、それに中世になって新しく参加した一部の上層武士たちであった。百姓・町人はもとより、一般の武士も文盲であった事実を、建部綾足（たけべあやだ）の母方の祖父である大道寺友山（みちみちともやま）が、『武道初心集』（二六四年刊）で次のように指摘している。

戦国時代までの一般の侍は、筆をもって一文字を書くあたわざる者が大部分であった。しかし政権が安定して、農工商三民の

上に立つ侍ともなれば、文盲にては申しわけが立たない、といっている。道德と法律で治める文治主義時代の侍が、文盲で無道德というのでは、申しわけが立たないどころか、支配者として存在することができなくなるのである。

その事をもっとも痛感したのは幕府であったから、寛永七(一三三〇)年に幕府は学吏林羅山に命じて、上野の忍が岡に塾舎と書庫を建てさせて、旗本教育をはじめた。のち元禄三(一六八六)年、湯島に移転して聖堂(昌平黌)となったのである。各藩も当然、藩士のための学校、城下都市の藩校と小都市の郷学を設立したので、十七世紀の半ば頃までには、一般の武士も文盲から解放され、支配階級としての道德教育を受けたのである。

それに対して、農工商の三民社会では、統一的な貨幣経済時代が到来し、しかも日常生活の物資購入から商取引までも、帳面による掛売り掛買いを原則としたために、読み書き・算盤が最低の必須課目となった。寛永四年に初版が出ている『長者教』に、農工商三民の必須課目は、第一に読み書き、第二に算盤、第三に商品の目ききとある。

その三民のために、藩学・郷学など武士教育の公立学校に対して、寺子屋という私立の学校がぞくぞくと現われた。浪人・僧侶・神官・医師・俳諧師などが教育に従事した寺子屋という名称は、寺院が学校代用であった前時代の名残りである。その他、寺子屋に通えない商家の丁稚などは、砂手習(すなてなひ)といって、お盆に砂を入れて箸や指で習字し、算盤も子守りの片手に先輩から習うと西鶴が『日本永代蔵』で書いている。そういう丁稚がやがて手代となり、暖簾(のれん)をわけてもらって一家を立てると、それぞれの家元へ通って、和歌・俳諧・茶の湯・謡曲・狂言・音曲・香道などのいくつかを、社交的教養として身につけたのである。

むかしは十人寄れば皆物事にうとく、我身の上の事ばかりも埒明くる者稀なり。自然と義理につまれる云分にも、一つ一つありのままに書付る筆者は、五町七丁のうちにもなき事なりしに、今時は物かかぬといふ男はなく、何事にても外の智恵をからず、面々に諸事を済さぬといふ事なし。(西鶴織留三)

町人階級がスタートを切ってから半世紀後の貞享・元禄時代(一六八〇年代)には、都市の町人の文盲は一掃され、誰でも自分の言

い分を、自分で書きとめることができるようになったのである。

定型詩・俳諧の登場

文盲から解放されたということは、文字による表現能力と読書能力を一挙にかちえたということである。だからここではまず、表現能力が何をいかに変え、かつもたらしたかについて述べよう。

十六世紀までの武士をふくめた国民大衆は、文盲であったから、文字で表現された定型詩の和歌・連歌や物語類とは、無縁の存在であった。彼等みずからの抒情は、音楽性を主とする民謡・閑吟集などによってうかがうほかはない。また国民大衆へ伝達する必要から書かれた『太平記』や『平家物語』などの戦記文学は、「太平記読み」や琵琶法師による「語り物」の様式で伝達されざるをえなかったのである。

ところが十六世紀の半ば頃、民衆のがわに近い伊勢の神官の荒木田守武もりたけ（五十九年没）と浪人の山崎宗鑑そうかん（五十八年頃没）が、時勢を敏感にキャッチして、それまで連歌の余興として詠み捨てにされていた、滑稽卑俗で民衆詩的性格をそなえた俳諧を記録（大筑波集）にとどめ、また実作（守武千句）によって作法を示したりしたので、俳諧は独立の機運を迎えたのであった。だがその後までもなく訪れた激烈な動乱期によって、その伸張ははばまれたのであったが、安定した徳川政権の登場による急速な文盲追放の成果はいちじるしく、寛永初年（一六五〇年代）、守武・宗鑑によって時ときかれた俳諧の種は発芽しはじめた。

その俳諧流行のきざしをいち早くキャッチし、率先して指導者の位置についたのは、天文の動乱期に没落した摂津高槻城主入江五郎政重の孫にあたる松永貞徳（一六三三年没）であった。一流の歌人であり、連歌師であり、歌学者であった彼は、当時の上方の文化人の多くがそうであったように、徳川政権に近づかず、京都に住んで市井の文学者として、新興庶民のために挺身ていしんしたのであった。それから十年もたたない寛永十（一六三三）年には、門下の町人俳人松江重頼しげより（撰糸売り）に野々口立圃りゅうほ（雛人形商）が協力して貞

徳を説得し、日本における最初の民衆詩集(定型詩・俳諧)である『大子集』十七巻が刊行されている。作品は幼稚な言語遊戲の段階にあるが、民族詩集としての『万葉集』、貴族詩集としての『古今集』に比肩すべき民衆詩集の登場であった。

その『大子集』には、伊勢・京都・堺・江戸・因幡・大阪の順で、わずか一七八人が出句しているが、それから約二十年後の明暦二(一六五六)年に出版された、貞徳門の安原貞室編の『玉海集』になると、作者は六五八人、ほぼ全国に及ぶ貞門の分布図ができ上がっている。歴史はじまって以来はじめて、民衆のための定型詩として登場した俳諧は、わずか三十年あまりで定着したのである。しかし貞徳をはじめ、その門下の指導者(宗匠)たちの努力は、作法の整備と普及についてやされたので、質的向上は遅々たるものであった。大阪天満宮所屬の連歌師で、貞門の派閥外にあった浪人あがりの西山宗因(一六三三没)が提唱した風俗詩・談林俳諧が、急速に三都を席卷したのは、旧態依然たる貞門の言語遊戲に、人心が倦んでいたからである。そしてその宗因風を経過することによって、芭蕉と西鶴が登場し、元禄の文運を招来したのであった。

時に連歌の掟をゆるがせにして俳諧といふも、これ歌道の一体なり。むかしは世を隙になす人、あるひは神主又は武士のもてあそびにしてありけるを、ちかき世上にはやり過ぎ、人の召使ひの小者(下男)下女までも、いたさぬといふ事なし。(西鶴 織留三)

俳諧は半世紀にして、完全に大衆詩として定着しているのである。享受と創作の喜びを兼備した、この共同体文学を社交的教養として確保した市民を地盤として、十七世紀末の文芸復興は成立したのである。

古典解放

貞門の宗匠の多くは、最高指導者の松永貞徳をはじめとして、門下の北村季吟・安原貞室・野々口立圃・加藤盤斎・山岡元隣など、それぞれ和歌・連歌をたしなみ、したがってまた歌学者であった。だから彼等の俳諧観は、民衆詩であることを強調しな

からも、和歌・連歌への階梯かいていであるというにあった。民衆の指導者として挺身した姿勢は前向きであるが、その教養は中世的であつたから、彼等は和歌・連歌へ進むための基礎知識として、王朝・中世の古典の学習を要求したのである。

俳諧を学び給はば、八代集、新勅撰集、伊勢物語、さ衣、つねづね学び給ふべし。源氏物語はわきて故事多くして、もつとも重宝たり。

師説を祖述した貞徳門の池田是誰これたれも、その著『初元結はつもとゆい』（寛文二年刊）で、古典の学習を強調している。

だが一通りの読み書きができるという、寺子屋程度の教養しか持ち合わせていない市民たちが、いくら古典の学習をすすめても、またいくら意欲的に学習しようとしても、注釈のない原典を読みこなせるはずがない。そういう状況に対処して、歌学者であつた貞門の宗匠たちは、それぞれに応じて古典の訳業に尽力している。たとえば貞徳は『徒然草なぐさみくさ 慰草』や『百人一首抄』、盤斎は『伊勢物語』『枕草子』『方丈記』『徒然草』『新古今集』などの注釈、立圃は『十帖源氏』や『おさな源氏』、元隣は『伊勢物語』『源氏物語』『百人一首』『徒然草』『方丈記』などの評釈をという盛況である。なかんずく北村季吟は拔群で、源氏注釈の名著『湖月抄こづしやう』をはじめ、『万葉拾穂抄』『八代集抄』『和漢朗詠集注』『土佐日記抄』『大和物語抄』『伊勢物語拾穂抄』『枕草子春曙抄』『徒然草文段抄』というふうに、八方に手をひろげている。そしてその努力が、たんに学究としてのものでなかつたことを、彼みずから『続連珠俳諧用意問答れんじゆ』（延宝元年序）で、次のように語っている。

彼老人（貞徳）うせ玉ひて、やう／＼年月へだたりゆくにそへて、歌書もしらず師伝もなき輩も、ほどほどにつけて初心の人の師となりつつ、集をえらび万句の席をひらきて、若輩の雑言をもきはらず、（中略）おぼえずして心も放埒に、身も無礼なりゆくが歎かしさに、予随分に歌書に註して、一家の門人にしめさんがため、よろづをさしおきて源氏・枕双紙など板行せしめ侍し。たとひ他門の人も、心ありてまことの俳諧をこのまんとがらの、若しは歌学のたすけともなるべきにや。

季吟にかぎらず貞門宗匠たちの古典注釈は、俳諧をたしなむ門人たちに、その基礎知識としての歌学入門を目ざしたものであ

つたのである。さらにまた上層町人ともなると、直接に国学者に師事して古典を学んでいる。

中にも歌字を好み、万葉集、古今集、伊勢物語などは暗記したり。その学問おのづから伝へ聞えて、大坂の富人多く弟子となれり。(年山紀聞)

と、水戸光圀^{みつくに}に仕えた国学者の安藤為章^{ためあきつ}が、下河辺長流^{しもこうべちやうりゅう}について語っている。

十六世紀まで、特権階級(貴族・僧侶・上流武士)に独占されていた古典文学は、十七世紀に入ると、俳諧の基礎知識という名目で、庶民に解放されたのである。すでに俳諧という文芸活動を行ない、その基礎知識として古典に親しんだ町人たちであったからこそ、市民による元禄文芸復興は可能だったのである。

出版技術の確立

最後に、もしも十六世紀までの「筆写による古典の伝承」という非能率的な手段が改革されなかったならば、市民文学の時代はように到来しなかったであろう。京都を中心とする少数の特権階級の需要を満たすだけであつたから、九世紀近くもそれと間に合わせてきたのであるが、今や全国の都市や農村に、文盲から解放された新しい読者層が登場したのである。その広範な読者の要求を満たすには、どうしても新しいマスコミの技術が必要とした。

そういう時代にモデルケースとなつたのは、十六世紀末の秀吉時代に、宣教師たちがヨーロッパからもたらした印刷術であつた。日本で最初のヨーロッパ文学の翻訳で、のちに仮名草子にもなっている『伊曾保物語』(天草学林版)のローマ字活字本が出版されたのは、文禄三(一五九四)年のことであり、その他聖徒伝の『サントスの御作業』(一五九二年)、『ドチリナ・キリシタン』や『信心録』(ともに一五九五年天草版)などが、どしどしと刊行されている。秀吉も関心があつたと見えて、征韓の役の戦利品として、大陸の銅活字をもたらししているが、さすがに文治主義時代を確立した徳川家康は、積極的に出版事業を推進している。足利学校^{あしかが}の第九

世の庠主 三要元估に伏見学校を經營せしめ、木活字十余万個を与えて、慶長四（五）年（一五九）年から同十一年までに、『孔子家語』をはじめ、『六韜』『三略』『貞觀政要』『東鑑』など、八種八十冊を刊行せしめている。また駿府に隠退した後も林羅山に命じて、慶長十九年に金地院崇伝が献上した『大蔵一覽』を刊行せしめている。

関東における將軍家康の政教軍事関係の漢籍刊行に対して、京都においては宮廷芸術家の本阿弥光悦（寛永十四（一六三）年没）が、嵯峨の大町人角倉素庵の協力を得て、日本古典文学の翻刻を開始した。『伊勢物語』『源氏物語』『保元物語』『平治物語』『平家物語』『古今集』『徒然草』『方丈記』『撰集抄』『百人一首』『能花伝書』など約二十種で、嵯峨本とも光悦本とも、また角倉本ともいう。それは「今ときめける林道春など、太子（聖徳）をそしり、兼好のつれ／＼草、源氏物語等をそしらるるがごとき、朱晦庵（朱子）が余風をまねらるる事と、我々はをかくこそ候へ」（本阿弥行状記）という、関東の儒教文化に対する宮廷芸術家光悦の批判精神の結果であった。

しかし慶長・元和ごろの刊本は、官版でなければ篤志家の私家版で、庶民とはひとまず無縁の存在であった。だがそれによって、貴族や社寺の書庫に秘蔵されていた和漢の古典は、解放されることになったのである。さらに大陸の銅活字を模した慶長・元和期の木活字印刷は、寛永期（二）年頃に入ると、連続体の草仮名を使用する日本文印刷に適当な整版印刷（木版）に移行するとともに、京都を中心に民間の営利的な本屋（出版・販売）が登場した。

そして元禄の文芸復興期までの約半世紀の間に、日本の古代・中世の古典文学はもとより、中国の漢詩文・医書・曆書・辞書、さては新作の仮名字や俳書まで刊行されて、三都の本屋で売り出されている。天和元（二）年刊の『書籍目録大全』に記載された、慶長から延宝末までの八十年間に刊行された日本・中国の書籍六千余种が、その盛況を伝えている。

エネルギーな市民階級の台頭、文盲追放の結果としての表現能力と読書能力の取得、古典の解放とマス・コミの技術である印刷術の普及、これらの諸条件をかね備えることによって、市民による元禄文芸復興は遂行されたのである。

二 人と生涯

西鶴の顔

西鶴に逢て

名をもつて鳴門はならぬ霜夜哉

元禄三（六九〇）年の冬十一月、当時四十九歳の西鶴は四国の阿波徳島に旅し、同地の俳人と俳諧を興行した（元禄四年刊・四国猿）。その時、阿波俳人の富松吟夕は、延宝八（一六九〇）年五月の一昼夜独吟四千句「大矢数」の興行に参会して以来、たえて久しい西鶴（西鶴）に對面して、その感銘を託したのがこの句である。

吟夕の故郷の名勝鳴門の名は、天下に鳴りひびいている。が、それは虚名ではない。名より以上に、それ自身が鳴りはためているのである。しかも万物が死にたえたような肅殺の氣のみなざる霜夜に、超然とひとり鳴りひびいている風景は壮絶である。大阪談林の重鎮、『一代男』の作者、独吟二万三千五百句の作者といったむなし文名が、出会った瞬間に消えうせて、吟夕はまのあたりに見る充実した人間西鶴の姿に打たれたのである。芳賀一品えがくところの西鶴晩年の肖像画（口絵）こそ、まさにこの吟夕の印象を形象化したものにはかならない。そしてそれはまた、西鶴を敬慕した後輩の其角が、「折々にふれては顔なつかし」（句兄弟）といった、忘れがたい風貌である。

四花菱の定紋つきの羽織を着た、この座像の西鶴は、一見短軀とわかるくせに、きわめて重量感がある。だがよく見ると重量感はない、もっぱらその途方もない頭部にかかっているようである。坊主頭のせいでもあるであろうが、並はずれて長くなだらかな中央突起部をもった頭蓋骨と、大きくゆたかな耳朶、肉づきのよい頬と、あらゆる種類の快楽や苦痛や罪業を刻みこんだ深い皺、その